



ローマ法王教の狙い

良心の自由の危機

大争闘シリーズ No.7



大争闘シリーズ No. 7

ローマ法王教の狙い

良心の自由の危機

(キリストとサタンの大争闘 35 章)

目次

Contents

カトリックは変わったか	1
良心の自由とローマ・カトリック	3
法王制の本質	6
カトリックの欺瞞的魅力	10
「神の代理者」	12
迫害の歴史	16
キリストなしのキリスト教	20
プロテスタントの変質	23
アメリカにおける宗教界の傾向	28
日曜休業令とその影響	31
偽造文書による権威づけ	34
暗黒時代の歴史	38
「死ぬほどの傷」がなおる	41
ローマ教会の将来	44
差し迫った危険	47

はじめに

全世界の人々が陥っている三大欺瞞は、進化論と靈魂不滅とそしてローマ法王教妄信であろう。

この小冊子は、聖書の預言からローマ法王教の真の狙いは、①再び世界を支配すること、②プロテスタントが行ったことをすべて無効にすること、③再び迫害を復活させることを暴露する。

ローマ法王は、今や世界の「平和の使者」「世界の道徳の指導者」として崇められ称えられている。しかもプロテスタントの大伝道者、ビリー・グラハムがそう宣言した。一体、プロテスタントはどこに行ったのであろうか。ルターや、ウエスレーや宗教改革者たちの打ち立てた信教の自由と、彼らが固くすえた原則はどこに消え去ったのだろうか。

近い将来、自由のチャンピオン、アメリカはどんな豹変を見せるのか。

カトリックは変わったか

今日ローマ・カトリック教は、プロテスタントから、過去の時代よりもはるかに好意をもってみられている。カトリック主義が優勢ではなくて、カトリック教会が勢力挽回ぼんかいのために融和的な態度をとっている国々においては、改革主義の教会を法王教から区別する教理に対して、ますます関心が薄らいできている。一般に次のような意見を持つ者が多くなってきた。「我々は従来考えられてきたように、主要な点では、さほど広く隔たっていない。むしろ我々が極めてわずかな譲歩をするならば、ローマとの良好な理解が成り立つ」と。かつてプロテスタントの教会

で良心の自由を極力尊重した時代があった。



もともと良心の自由というものは、非常な犠牲を払って獲得したものであった。彼らはその子供たちに法王教を嫌うように教え、ローマと同調しようとすることは神に対して不忠実であるとまで主張してきた。しかし今日表明される意見は、なんとはなはだしく異なっていることであらう。

法王教を弁護する人々は、この教会が中傷されてきたと公言し、今日、プロテスタント側はこのような主張を容認する傾向がある。多くの者は、無知と暗黒の時代に教会の統治の特徴であった憎むべき行為や不合理をもって、今日の教会をさばくのは正しくないと主張する。彼らは法王制の恐怖すべき残酷な行為を、野蛮な時代の結果であるとし、近代文明の影響がこの教会の考えを変えたと弁護する。

これらの人々は、この高慢な権力によって800年むびゅうの間無謬説が唱えられたことを忘れてしまったのであろうか。この主張は撤回される

どころか、十九世紀に入って、以前にもまして強調されたのである。ローマ教側は、「教会はこれまで決して誤ったことはなかった。また聖書によれば、これからも決して誤ることはない」と力説してはばからない（John L. von Mosheim, “Institutes of Ecclesiastical History,” book 3, century 11, part 2, chapter 2, section 9, note 17）。このようなローマが、過去にそのやり方を支配していた主義と主張を撤回するなどということが、果たして考えられるであろうか。

良心の自由とローマ・カトリック

ローマ・カトリック教会は、無^{むびゆう}謬説を絶対に撤回しないであろう。この教会は、その教義に反対する者を迫害するために行ったすべての行為を、正しいと主張する。とすれば、機会があったら同じ行為をくり返さないと誰が保証できようか。現在、諸国家の政府によって課せられて

いる数々の拘束が取り除かれ、ローマが以前の権力を取り戻すとき、たちまち圧政と迫害が復活するであろう。

ある有名な著述家は、良心の自由に関する法王教の態度について、またその政策の成功が特にアメリカ合衆国を脅かす危険について、次のように語っている。

「アメリカ合衆国におけるローマ・カトリック教を恐れることは、頑迷^{がんめい}である、あるいは幼稚な者のすることであると考える者が多い。このような者は、ローマ・カトリックの性格と態度の中に、我々の自由な制度に敵するものがあることを全然見ていないか、それとも、この教会の発展の中に不吉なものを何ら見いだしていないかである。そこでまず第一に、米国政府とカトリック教会との根本原則のいくつかを比較してみたい。

アメリカ合衆国の憲法は、良心の自由を保証している。これ以上貴重で根本的なものはな

い。法王ピオ九世は、1854年8月15日発布の回勅の中で『途方もない誤謬極まる教理であるところの良



心の自由の擁護は、極めて有害で、国家にとって最も恐るべき害毒を流すものである』と言った。この同じ法王は、1864年12月8日の回勅の中で、『良心の自由と、宗教上の礼拝の自由を主張する者』また『教会は暴力を用いてはならないと主張するすべての者』を呪った。

米国における法王教の穏やかな態度は、心の変化を意味するのではない。この教会は自分が無力なところでは寛容である。オコンナー司教は、『今しばらく宗教自由に対して忍耐する。しかしこれも、カトリックの世界が危険を犯さずに宗教自由に対する反対政策を実施できるようになるまでの間である』と言っている。……

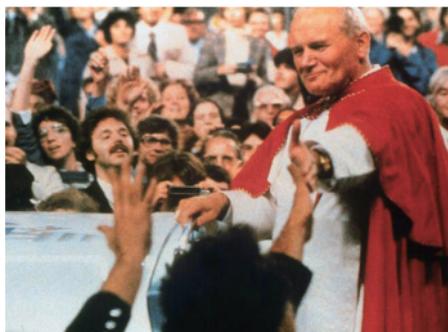
セントルイスの大司教は、次のように語った。『異端や不信仰は犯罪である。キリスト教会において、たとえばイタリア、スペインのように住民のすべてがカトリック教徒である場合、しかもカトリック教がその国の法律の不可欠な一部となっているキリスト教国においては、異端と不信仰とは他の犯罪と同様に処罰される』。

カトリック教会のすべての枢機卿、大司教、司教が、法王に対して、忠誠の宣誓を行うが、その中に次のような言葉がある。『わが主（すなわち法王）とその後継者に対する、反逆者、分離者、異端者たちは、我々が全力をあげて迫害しこれを阻止する。』」（Josiah Strong, "Our Country," ch. 5, pars. 2-4）。

法王制の本質

ローマ・カトリック教会の中に真のキリスト者たちがいることは事実である。この教会の幾

千の者は、自分たちに与えられている光に従って、最善を尽くして神に仕えているのである。彼らは、神の言葉を手に入れる



ことが許されていない。そのために彼らは真理に気がつかないのである。彼らは、生きた、心からの奉仕と、単なる形式的な儀式のくり返しに過ぎないものとの間の著しい違いに気がついたことがなかった。うわべだけの、満たされない信仰の中で教育されたこれらの人々を、神はやさしいあわれみをもってごらんになる。神は、彼らを取り巻いている濃い暗黒に光が射し込むようにされる。神がイエスのうちにある真理を彼らに示されるので、やがて多くの者が神の民と共に立つのである。

しかし今日でも、ローマ・カトリック教の

制度及び組織は、その過去の歴史のどの時代においても見られるように、キリストの福音と調和するものではない。プロテスタントの教会は、大いなる暗黒の中にある。そうでないならば、彼らは当然時のしるしを認識するはずである。ローマ教会の計画や運営方式は、実に遠大なものである。この教会は、再び世界を支配するために、また迫害を復活させるために、またプロテスタントが行ったすべてのことを無効にするために、激しい決定的な戦いの準備として、その感化力を広げ、その勢力を強めようと、あらゆる手段を用いている。カトリック教は至る所に地歩を占めつつある。プロテスタント諸国において、カトリックの教会や礼拝堂が数を増しているのを見られよ。米国において、カトリックの大学や神学校がいかに増加し、プロテスタントの後援



を受けていることであろう。英国における儀式主義の発展や、カトリック教会へ入るためにプロテスタントから脱会する者が多いことを見られよ。こうした事柄は、福音の純粋な原則を尊重し保持する者が憂慮しなければならないことである。

プロテスタントが法王制によけいな手出しをし、ついにはこれと親しい交わりをして、妥協し、譲歩するに至ったいきさつは法王教徒ですら驚き、理解に苦しんでいるところである。事実人々は、法王制の真の性格、またこの教会が支配権を得たとき心配される危険に対して目を閉じているありさまである。ゆえに人々は、政治的または宗教的自由に対するこの危険極まる敵の進出を阻止するために目ざめなければならない。

カトリックの欺瞞的魅力

プロテスタントの中には、カトリックの宗教は魅力がなく、その礼拝は退屈で、無意味な儀式のくり返しであると思っている者が多くいる。この点彼らは間違っている。ローマ・カトリック教は、偽りに基づいているとはいえ、粗野で見苦しい欺瞞ではない。カトリック教会の礼拝と儀式は極めて印象的である。その荘厳な儀式、厳粛な礼拝は、人々の感覚を魅了し、理性と良心の声を沈黙させるに十分である。目は魅せられる。壮麗な教会堂、堂々たる行列、黄金の祭壇、宝石をちりばめた聖遺物の箱、えり抜きの絵画、精巧な彫刻などが、美を愛する心を魅了する。耳もまた恍惚^{こうこつ}とさせられる。その音楽は実に絶妙無比である。オルガンの豊かな音色が、聖歌隊の多くの歌声と相和して、大聖堂の高い丸天井と円柱の立ち並ぶ通路に響き渡り、人々の心に畏敬と尊崇の念を起さずにはいないのである。

こうした外見上の
の壮麗さと虚飾と
儀式は、罪に悩む
魂の渴望を満たす
ように見せかける
ものにすぎず、内



面の腐敗を示すものである。キリストの宗教は、人々の受けをよくするためのそういった呼びものを必要としない。真のキリスト教は十字架から輝く光に照らされて、純潔で慕わしく、また美しく見えるので、その価値を高めるための外見的飾りを必要としない。神が価値を認められるのは、聖潔の美であり、柔和で穏やかな精神の美である。

すぐれた文体は、必ずしも純潔で高尚な思想を示すものではない。芸術上の高尚な観念、微妙に洗練された趣味は、現世的で肉欲的な心の中にもよくある。これらはしばしばサタンによって利用されて、人々に、魂の必要を忘れさ

せ、将来と永遠の生命を見失わせ、無限の救い主を忘れさせ、ただ現世のためだけに生きるようにさせるのである。

形式的な宗教は、生まれ変わらない心にとって魅力がある。カトリック教会の礼拝の虚飾や儀式は、魅力的な力を持っており、それによって多くの者が欺かれる。そして彼らはローマ教会を本当の天の門と見るようになる。その足を真理の土台の上に堅く置いて、その心を神のみ霊によって新たにする者だけが、法王制の影響に打ち勝つことができるのである。キリストについての体験的知識を持っていない幾千の者は、力のない形だけの敬虔さを受け入れるようになる。そのような宗教こそ大衆が望むところのものなのである。

「神の代理者」

カトリック教会は罪を許す権威があると主

張しているために、信者たちは罪を犯してもかまわないと思うようになる。また、それなしには許しは与えられないという告解の儀式は、悪を容認するのにも役立っている。墮落した人間の前に



人間がひざまずき、心の中の隠れた思いや過ちを告白するということは、人間性を墮落させ、その魂のあらゆる気高い性質を低下させているのである。人間は自分の生活の罪を司祭—誤りがあり、罪深く、死すべき者で、しばしば酒と放蕩ほうとうのために腐敗した人間—に告白することによって、品性の標準は低下し、彼はそのために汚されるのである。神に関する彼の観念は、墮落した人間の姿に下落する。なぜなら、司祭が神の代理として立つからである。人間が人間に行うこの下劣な告白は、この世を汚し最後の破滅に陥れている害悪が流れ出す目に見えない源

である。しかし、放縦を愛する者にとっては、同じ人間に告白する方が、神にその心を開くよりも好ましいのである。人間の性質として、罪を捨てるよりは難行苦行をするほうが、好みに合うのである。肉の欲を十字架につけるよりは、麻布といたくさと皮膚をすりむく鎖によって肉体を苦しめる方が、易しいのである。肉の心にとっては、重苦しいくびきを負う方が、キリストのくびきを負うよりも好ましいのである。

ローマ教会とキリスト初臨当時のユダヤ教会との間には、際立った類似点がある。ユダヤ人は、神の律法のあらゆる原則を密かに踏みにじっていながら、表面的にはその戒めを厳格に守り、それに苛酷な要求と言い伝えをつけ加えて、服従することを苦痛とし、重苦しいものにしてきた。ユダヤ人が律法を崇めると公言したように、カトリック教徒も、十字架を崇めると主張している。彼らは、キリストの苦難の象徴としての十字架を高めるが、それでいて、それ

が表している主を、彼らの実生活において否定している。

カトリック教徒は、十字架を、教会の上に、祭壇の上に、あるいはその衣服につける。至るところに十字架のしるしが見られる。外面的には、至るところで十字架が高められ崇められている。しかしキリストの教えは、多くの無意味な伝説、偽りの解釈、厳格な規則などの下に埋もれている。頑迷なユダヤ人に関する救い主の言葉は、ローマ・カトリック教会の指導者たちに、いっそう大きな迫力をもって当てはまる。「また、重い荷物をくくって人々の肩にのせるが、それを動かすために、自分では指一本も貸そうとはしない」(マタイ 23:4)。良心の叫びに敏感な者は、絶えず恐怖の念に襲われ、神の怒りにおののいているにもかかわらず、教会の権威者たちの多くは、快樂を欲しいままにし、ぜいたくな生活をしている。

聖画像や聖遺物の崇敬、聖徒たちへの祈り、

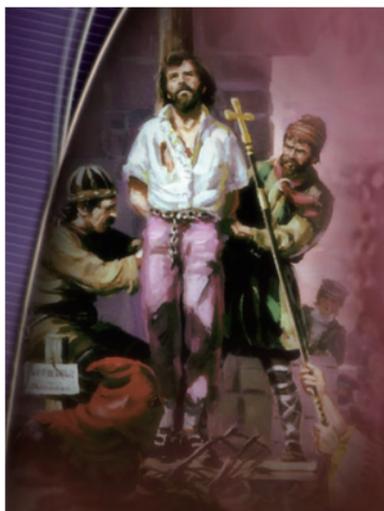
また法王崇拜は、人々の心を神と神のみ子から引き離すサタンの策略である。サタンは、人々を滅ぼすために、救いを見いだすことのできる唯一のお方から、彼らの注意をそらそうと努めている。サタンは、「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」と言われたキリストに代わるることができる何かの対象物に、人々を向かわせるのである。(マタイ 11:28)。

迫害の歴史

サタンは、神のご品性、罪の性質、また大争闘において問題となっている真の論争点について、誤解させようと絶えず努力している。サタンの^{きべん}詭弁によって、神の律法に対する義務観念が弱められ、人々は罪を平気で犯すようになる。同時に彼は、神に対して誤った観念を植え付け、人々が愛をもって神を見るより、恐れと憎しみ

をもって見るようにさせる。サタンは自分自身の残忍な性質をあたかも神の性質であるかのように思わせ、しかもこれを教理の中に織り込み、あらゆる礼拝の様式の中に表している。このようにして人々の心の目は閉ざされ、サタンは、神と戦うために彼らを自分の手先として獲得する。神の属性についての誤った考え方によって、異教の国民は、神の恩恵を受けるためには人間の犠牲が必要であると信じるようになり、さまざまな偶像礼拝のもとで恐るべき残酷な行為が行われてきた。

ローマ・カトリック教会は、異教とキリスト教との形式を結合したものであり、異教と同様に神のご品性を間違っ^て教え、異教に劣らないほど残酷で忌まわしい慣



習を用いてきた。ローマ法王の至上権時代には、教会の教理に服従させるために拷問の道具があった。その要求に応じない者のためには、火刑柱が用意された。審判においてははっきりさせられるまでは決してわからないほどの規模の虐殺があった。教会の高僧たちは、彼らの主人であるサタンの下で、その犠牲者に死を与えることなく最大の苦痛を与える方法を発明しようと苦心した。多くの場合、恐ろしい拷問は、人間の耐え得る最大限度までくり返された。そして犠牲者は力が尽き果てて、死を快い解放として喜んで迎えるのであった。

これがローマに反対する者の運命であった。またローマは、教会の信者に対しても、むち打ち、断食、その他ありとあらゆる悲痛な方法で訓練をした。懺悔^{ざんげ}者は天の神の恩恵を得るために自然の法則を犯すことによって、神の律法を犯していた。彼らは、神が人間の地上の生涯を祝福し喜ばせるために作られたきずなを、断ち

切るように教えられた。自然な愛情を抑圧し、同胞に対するあらゆる同情の思いと心情を、神に敵するものとして押さえつけようと、むなしげな努力をして一生を送った無数の犠牲者が、墓地に横たわっている。

過去幾百年かにわたり、異教徒に対してではなく、キリスト教世界の中心とその全域において表されたサタンの徹底的残酷さを知ろうと思えば、ローマ・カトリック教会の歴史を見さえすればよいのである。この巨大な欺瞞の組織を通して、暗黒の王サタンは、神の栄えを汚し、人類を不幸に陥れようとする自らの計画を遂行してきた。そして、サタンが姿を変えて、教会の指導者たちを用いて着々と目的を達成し、成功を収めつつあるありさまを見ると、我々は、彼がなぜ聖書を非常に嫌うかという理由を、よく理解できるのである。もし聖書を読むならば、神の慈愛と愛とがよく理解され、神はこのような重荷を何一つ人間に負わせられないことが明

らかになるのである。神がお求めになるものは、砕けた悔いた心、へりくだって服従する精神だけである。

キリストなしのキリスト教

天に至るためには修道院生活を送らねばならないというような手本は、キリストの全生涯を通して一つとして見られない。キリストは、同情と愛の心が抑制されなければならないとは一度としてお教えにならなかった。救い主の心は愛にあふれていた。人間が道徳的に完全に近づけば近づくほどその感受性はますます鋭敏になり、罪をいっそう鋭く感じるようになり、苦しむ者に対する同情は深くなる。法王はキリストの代理者であると主張しているが、彼の品性は我々の救い主のご品性とどのように比べることができるであろうか。天の王としてのご自分に服従しない者があるからといって、キリスト

が人々を牢獄や拷問台に渡されたということがあっただろうか。彼を信じない者たちに、死の宣告を下されたことがあったであろうか。かつて彼がサマリヤの村で人々から侮辱を受けられたとき、使徒ヨハネは非常な義憤にかられて「主よ、いかがでしょう。彼らを焼き払ってしまおうように、天から火をよび求めましょうか」と尋ねた。イエスはこの弟子をあわれみをもってごらんになり、「人の子は、人の命を滅ぼすために来たのではなく、救うために来たのだ」と言われて、彼の粗暴な精神を戒められた（ルカ 9:54,56 欽定訳参照）。キリストによって表された精神と、彼の代理者であると称する法王との間には何とはなはだしい隔たりがあることであろう。

現在ローマ教会は、その恐ろしい残虐行為の記録を弁解しながら隠し、世界にもっともらしい顔を見せている。この教会はキリストのような衣を装っている。しかし教会は変わっていない

い。過去に存在した法王制のあらゆる原則は、今日も保持されている。暗黒時代に編み出された数々の教理は、今日も依然として支持されている。だからこの点で、誰も欺かれてはならない。今やまさにプロテスタントが尊敬しようとしている法王制は、かつて宗教改革の時代に世界を支配していたのと同じものである。その時神の民は、自分の生命の危険をお



かして、この教会の悪を暴露するために立ち上がったのであった。このカトリック教は今でも、かつて欧州の王や諸侯たちの上に君臨し、神の大権を主張した時と同じ誇りと尊大不遜な心を失ってはいない。今日もこの教会の精神は、かつて人類の自由を押しつぶし、いと高き者の聖徒たちを殺した時と同じに残忍であり、専横である。

法王制はまさしく、預言の中でこのようになると言われているとおりのもの、すなわち終末時代の背教である（Ⅱテサロニケ 2:3,4 参照）。自らの目的を達成するのに最も都合のよい性格を身に装うことが、この教会の方針の一つである。しかしカメレオンのように変わりやすい外見の下に、この教会はへびのような不変の毒を隠している。「我々は、異端者もしくは異端と疑われる人に対して誓約を守ってはいけない」と法王は公言している (Lenfant, vol. 1, p.516)。一千年にわたるその記録が、聖徒の血によって記されているこの権力が、今日キリストの教会の一部として承認されてよいであろうか。

プロテスタントの変質

カトリック教は以前ほどプロテスタントと広く隔たっていないという主張が、プロテスタントの諸国において唱えられてきたことに

は、理由がないではない。そこには変化があったのである。しかしその変化は、法王制の中にあつたのではない。確かにカトリック教は、現在のプロテスタントによく似通っている。それはプロテスタントが、宗教改革者の時代以後、ひどく墮落してしまつたからである。

プロテスタント諸教会は、世俗の関心を求めたために誤つた愛に目をくらまされてしまつた。彼らは、



どんな悪の中にも善いものがあると信じることは正しいことである、と思ひ込んでいる。その必然的な結果として、ついにはすべての善いものの中に悪なるものを信じるに至るのである。かつて聖徒たちに伝えられた信仰を守つて立つとうとしないで、彼らは今や、むしろローマに対して無情な見解を持つていたことを陳謝し、自

分たちがかたくなであったことに対して許しを求めているのである。

法王制に対して好意を持っていない大多数の人々でさえ、その権力と影響から来る危険をほとんど理解していない。多くの者は、中世を覆っていた知的道徳的暗黒は、法王制の教義、迷信、圧政を広げるのに役だったが、現代のすぐれた知性や、知識の普及、また宗教問題に関する自由の増大は、迫害や専制政治の復興を抑止しているとの見解を抱いている。この文明の時代に迫害状態が再現されるなどというような思想は、嘲笑される。知的、道徳的、宗教的な大きな光が現代に輝いているということは事実である。神の聖なるみ言葉が開かれて、天来の光が世に輝いている。しかし、与えられた光が大きければ大きいほど、それを曲解し拒絶する者の暗黒は、ますますひどくなることを忘れてはならない。

祈りをもって聖書を研究するならば、プロテ

スタントは法王制の正体を知り、法王制を嫌悪しそれを避けるようになる。しかし多くの者は、自分では賢いと思っているために、真理に導かれるために謙遜に神を求めることの必要を感じていない。彼らは自分たちが啓示に浴している者のように誇るが、聖書についても、神の力についてもほとんど無知である。彼らはその良心を何かの方法で鎮めざるを得ないので、最も霊的ではないもの、最も自尊心を傷つけないものを求める。彼らは、一見いかにも神を覚えるような体裁を保ちながら、その実、神を忘れる方法を求めるのである。法王制は、これらすべての要求にかなうように巧みにできている。つまり法王制は、ほとんど全世界を包含する二種類の人々、すなわち、自分の功績によって救われようとする者と、罪のまま救われようとする者のために用意されている。ここに法王制の権力の秘訣がある。

過去の知的大暗黒の時代は、法王制の成功に

都合がよかったように見られてきた。しかし、大いなる知的進歩の時代も、その成功にとって同じく都合がよいことが、実際に示されるであろう。神のみ言葉もなく、真理の知識もなかった過去の時代には、人々の目は欺かれ、幾千の者は、自分たちの足下に張られた網が見えないでわなに捕えられた。今の時代には、「偽りの知識」である人間的思索のはなやかな光に目をくらまされている人が多い。彼らは網に気づかず、目隠しされたようにたやすくそれに入り込んでしまう。神は人間の知的能力が創造主からの賜物とみなされ、真理と正



義のために用いられるように計画された。しかし、人間は自己を誇り野心を燃やして、神の言葉よりも自分自身の理論を尊重するに至り、その知恵がかえって無知な者よりも大きな害毒を

与えるようになった。こうして、聖書の信仰の基礎を覆す現代の偽りの知識は、知識の抑圧が暗黒時代に法王制拡大強化の道を開くのに成功したように、人々が喜ぶ形式を持った法王制が受け入れられる道を備えることに成功するのである。

アメリカにおける宗教界の傾向

目下米国においては、教会の制度や慣習に対し国家の支持を得ようとする運動が、着々と進んでいる。これはプロテスタント諸教会がカトリック教徒の先例にならったものである。そればかりか、彼らは、法王制が旧世界において失った至上権を、プロテスタント・アメリカにおいて回復するための門戸を開きつつあるのである。そしてこの運動に、より重大な意義を与えるものは、日曜日遵守—すなわちローマ法王制に始まり、かつその権威のしるしであると

主張している習慣—
の強制を主要目的と
している事実である。
現にプロテスタント
諸教会を侵し、法王
制がかつて行った日



曜日遵守の働きと同じことをするようプロテ
スタント教会を導いているものは、法王制の精神、
すなわち世俗的習慣への一致の精神、神の戒め
よりも人間の言い伝えを尊重する精神である。

もし読者が、間もなく起ころうとしている戦
いにおいて用いられる手段を理解したければ、
過去の時代に同じ目的のためにローマが用いた
手段の記録をたどるだけでよい。法王制とプロ
テスタントが合同して、彼らの教義を拒む者を
どのように扱うかを知りたいければ、ローマが安
息日とその擁護者たちに対して表した精神を見
ればよい。

世俗の権力に支持された勅令、宗教会議、教

会礼典などによって、異教の祭日がキリスト教界で高い地位を獲得していった。日曜日遵守を強要する最初の法令は、コンスタンティヌス帝によって制定された法律であった（紀元321年・付録参照）。この法令は、町の住民には「この尊ぶべき太陽の日」に休むことを要求したが、農民には農業に従事することを許した。実質的には異教の法令であったけれども、それは皇帝がキリスト教を名目上受け入れた後、皇帝によって施行されたのである。

ところがこの勅令は、神の権威に十分に代わり得るものとならなかったため、日ごろ王侯の寵遇に浴することを希望していた司教エウセビウスは、コンスタンティヌスの親友であり追従者でもあったことから、キリストが安息日を日曜日に変更されたという主張を持ち出した。この新しい教理を証明するのに、聖書の証は一つも示されなかった。エウセビウスでさえそれが虚偽であることを無意識のうちに認め、本当の

変更者を指摘している。「安息日になすべき義務はどんなことでもすべて、我々が主の日に移した」と彼は言っている (Robert Cox, "Sabbath Laws and Sabbath Duties," p.538)。しかし、根拠がないにもかかわらず、日曜日についての議論は、人々に主の安息日を大胆に踏みこじらせた。世の栄誉にあずかることを欲する者はみな、この俗受けのする祝日を受け入れた。

日曜休業令とその影響

法王制が確立されるにつれて、日曜日尊重の運動が続けられた。しばらくの間、人々は教会に列席しないときには畑仕事に従事して、第七日が依然として安息日と見なされていた。しかし、変更は徐々に行われた。聖職にある者は、どんな民事訴訟の取り調べや判決も、日曜日には行うことを禁じられた。その後まもなく、どんな階級の者でも、すべての人は通常の労働や

俗事を休むこと、これを犯す者はそれが自由な人ならば罰金、奴隸の場合はむち打ちに処するとの命令が出た。後に、これを犯す富める者に対しては、財産の半分を没収するという勅令が出された。そしてついには、なお強情ならば彼らを奴隸にするという法令が出た。下層階級の者は、一年の間、追放の刑罰を受けるのであった。

奇跡も利用された。いろいろな不思議も伝えられた。ある農夫が日曜日に畑を耕そうとして、すきの泥を落とすため鉄片で磨いていたところ、その鉄片が彼の手にしっかりとくっついたので、二年間彼は「ひどい痛みと恥」をこらえて、それを身につけていたということが、まことしやかに伝えられた (Francis West, "Historical and Practical Discourse on the Lord's Day," p.174)。

後に法王は、教区司祭に、日曜日を犯す者たちを訓戒し、彼らが、自分自身や隣人の上に大

きな災いを招くことがないように教会に行って祈りをささげるよう勧めることを命じた。また日曜日に働いているとき、雷に打たれた者があるから、この日こそ安息日であるという主張が述べられた。これは、その後も広く用いられ、プロテスタントでさえ採用したのである。これについて司祭たちは言った。「彼らがこの日をなおざりにすることを、神がどんなに嫌悪されるかは、これによって明らかである。」さらに司祭や聖職者たち、王侯や貴族たち、その他すべての忠実な人々は、「この日の栄えを回復し、キリスト教のために、今後いっそう熱心に遵守するよう努力し注意すること」を要求された（ Thomas Morer, "Discourse in Six Dialogues On the Name, Notion, and Observation of the Lord's Day," p.271. ）。

会議の決議に基づく布告では不十分なことが分ると、教会は、人心に恐怖を与えて日曜日に労働をやめるように強制する法令を發布す

るよう、政府当局に懇請した。ローマにおいて開催された宗教会議においては、これまでの一切の決定について、さらに大きな強制力と厳格さが再確認された。それらは教会法の中に加えられ、ほとんど全キリスト教国にわたって政府当局によって施行された (Heylyn, "History of the Sabbath," pt. 2, ch.5, sec.7 を参照)。

偽造文書による権威づけ

しかし依然として、日曜日遵守を保証する聖書的権威のないことは、少なからぬ困惑を引き起こした。民衆は太陽の日を拝むために「七日目はあなたの神、主の安息である」という神の明らかな宣言を捨てる自分たちの教師の権威に、疑問を抱いた。そこで聖書の証言がないのを補うために、他の工夫が必要となった。十二世紀の終わりごろ、英国の諸教会を歴訪して熱心に日曜日の擁護に当たった者がいたが、彼は

忠実な真理の擁護者に拒絶された。そしてどんなに努力しても効果がなかったため、彼はしばらくその国を離れ、自分の教えを強要する何らかの手段を考案した。彼が戻ってきたとき、前回の失敗は見事に補われ非常な成功を収めた。彼は、神ご自身から授かったものであるという一巻の巻き物を持ってきた。それには日曜日は遵守すべきものであるとの命令と、これに従わない者を恐れさせるような脅し文句とが書きつらねてあった。この貴重な文書—実はそれが支持する制度と同様悪質な偽物—は、天から降下したもので、エルサレムのゴルゴタの聖シメオン寺院の祭壇の上で発見されたものであると言われた。しかし事實は、ローマ法王の宮殿が、それを生んだ出所である。教会の権力を伸ばしその繁栄をはかるためなら、詐欺であっても偽造行為であっても合法であると、各時代の法王教政治では認めてきたのである。

この巻き物は、土曜日の午後三時から月曜

日の日の出まで、労働を禁じていた。そしてその権威は、多くの奇跡が保証していると言うのであった。指定の時刻になっても働いていた人は、体が麻痺したと言い伝えられた。一人の粉屋が穀物をひこうとしたところ、粉の代わりに血がほとぼしり出てきた上に、水が勢いよく流れているにもかかわらず、水車は動かないのであった。ある婦人は生パンをオーブンの中に入れたが、取り出してみるとオーブンはあつく熱しているのにパンは生のままであった。また別の婦人は生パンを用意したが、午後三時になったので、月曜まで待つことにして翌日出してみたところ、天来の力でもってよく焼けてみごとにパンになっていた。ある人は、土曜日の午後三時過ぎにパンを焼いたが、翌日パンをさいてみたところ、中から血が出てきた。このような途方もない



迷信的な作り話によって、日曜日の擁護者たちは、その神聖さを確立しようとしたのであった (Roger de Hoveden, "Annals," vol. 2, pp.528-530 参照)。

英国におけると同様にスコットランドにおいても、昔からの安息日の一部を日曜日と結合することによって、日曜日をもっと尊ぶことを確立した。しかし、聖く守るべき時刻はいろいろと異なっていた。スコットランド王の勅令は、「土曜日は、正午から神聖なものとする」と布告した。また、その時刻から月曜日の朝までは、誰も世俗の仕事に従事してはならないと命じていた (Morer, pp.290,291)。

しかし、日曜日の神聖を確立するためにあらゆる努力が払われたにもかかわらず、一方においてカトリックの聖職者たちは、安息日の神聖な権威と、それにとって代わった制度が人間によって制定されたものであることを公然と認めた。十六世紀に、法王庁会議において次の

ような言明がなされた。「すべてのキリスト者は、第七日が神によって聖別され、ユダヤ人のみならず、神を敬うように装うすべての者によっても承認され、守られてきたことを忘れてはならない。しかし、我々キリスト者は、我々の安息日を主の日に変更したのである」(Morer, pp.281,282)。神の律法に不正な変更を加えていた者たちは、自分たちの行為の性質を知らなかったのではなかった。彼らは故意に自分自身を神よりも高くしたのである。

暗黒時代の歴史

ローマ教会が、自分たちと一致しない者に対してどんな態度をとってきたかは、ワルデンセスが受けた長



期間にわたる無慈悲な迫害に、その著しい例を見ることができる。ワルデンセスのある者は、真の安息日遵守者であった。なおその他にも、第四条の戒めを忠実に遵守したために、前者と同様の苦難を受けた者が数多くあった。エチオピアとアビシニアの教会の歴史は特に意義がある。暗黒時代の暗やみの中で、中央アフリカのキリスト者たちは世界から身落とされ忘れられてしまった。そして何世紀かにわたり、彼らは自分たちの信仰を実践する自由を享受した。ところが、ついに彼らの存在がローマ教会の耳に入り、まもなくアビシニアの皇帝はだまされて、法王をキリストの代理者として承認させられ、彼らのずるい計画に陥れられた。続いてその他の譲歩が行われた。やがて、最もきびしい刑罰の下に、安息日の遵守を禁じる法令が發布された（Michael Geddes, "Church History of Ethiopia," pp.311,312 参照）。しかし、アビシニア人はこれを厳しすぎるくびきとして、ついに断ち切る決心をした。恐ろしい戦いの後、ロー

マ教徒たちは国外に追放され、昔からの信仰が回復された。これらの教会は、自分たちの自由を喜ぶと共に、ローマの欺瞞、狂信、暴力、専制権力に関して、身をもって学んだことを決して忘れなかった。彼らはその孤立した地域で、他のキリスト教国に知られないでいることに満足していた。

アフリカの諸教会は、カトリック教会が完全に背信する前に守っていたように、安息日を守っていた。彼らは、神の戒めに従って七日目を守っていたが、教会の習慣に従って、日曜日に仕事をするのを避けていた。ローマは至上権を獲得するに及んで、自分たちが定めた日を高めるため、神の安息日を踏みにじるに至った。アフリカの諸教会は千年近くその姿が隠されていたために、この背教にはあずからなかった。ローマの権力下に陥ってから、彼らは、真の安息日を捨てて偽りの安息日を敬うように強制された。しかし彼らは、独立を回復するや否

や、第四条の戒めの服従に立ちかえった（付録参照）。

以上の記録は、ローマ教会が、どのように真の安息日とその擁護者に対して敵意をあらわし、教会が作りあげた制度に尊敬を払わせるために用いた種々の手段がどのようなものであったかを、明らかに示している。神のみ言葉には、ローマ・カトリックとプロテスタントが日曜日を高めるために協力するとき、これらの光景がくり返されるということが教えられている。

「死ぬほどの傷」がなおる

黙示録 13 章の預言には、小羊のような角を持った獣によって象徴された権力が、「地と地に住む人々」に、法王権—そこでは「ひょうに似て」いる獣によって象徴されている—を礼拝させるということが、はっきり述べられている。二つの角を持つその獣は、また「獣の像を

造ることを、地に住む人々に」語る。さらにそれは、「小さき者にも、大いなる者にも、富める者にも、貧しき者にも、自由人にも、奴隷にも」すべての人々に、獣のしるしを受けるように命じる（黙示録



13:11-16)。米国が小羊のような角を持つ獣によって象徴された権力であることと、ローマ教会が自らの至上権を特に承認するものであると主張する日曜日遵守を米国が強制するときに、この預言が成就するということとは、すでに明らかにされた。しかし、法王制にこのような敬意を表すのは米国だけではない。かつてローマ教会の支配を承認した国々に君臨した彼の権力は、今に至るまで破壊されずに強く残っている。そして預言にはその権力の回復が予告されている。「その頭の一つが、死ぬほどの傷を受けた

が、その致命的な傷もなおってしまった。そこで、全地の人々は驚きおそれて、その獣に従った（黙示録 13:3）。死ぬほどの傷を受けたとは、1798年の法王権の失墜を指している。この後、「その致命的な傷もなおってしまった。そこで、全地の人々は驚きおそれて、その獣に従った」と預言者は言う。パウロは「不法の者」が再臨の時まで存続するということをはっきり述べている（Ⅱテサロニケ 2:3-8 参照）。時の終わりに至るまで、彼らは欺瞞行為を続けて止まないのである。同時に黙示録記者は法王権に関して、「地に住む者で、ほふられた小羊のいのちの書に、その名を……しるされていない者はみな、この獣を拝むであろう」と記している（黙示録 13:8）。旧世界においても新世界においても、ローマ教会の権威だけに基づいている日曜日制度を崇めることによって、人々は法王制に忠誠の意を表明するのである。

十九世紀半ば以来、米国における預言研究者

私たちは、この証を全世界に発表してきた。今日起こっている数々の出来事の中に、その預言の成就に向かった急速な進展が見られる。神からの命令に代えて、そこを補うために奇跡を作り出さなければならない法王教の指導者たちと同様に、プロテスタントの教師たちも、日曜日遵守は神の権威を有すると主張するが、やはり同じように、聖書上の証拠に欠けている。日曜安息日を破る結果として、人類に神の審判が臨むという主張がくり返されるであろう。すでにそうした主張が始まっている。そして、日曜日遵守を強制する運動は、確実に勢力を得てきている。

ローマ教会の将来

ローマ教会の抜け目なさや狡猾さには驚くべきものがある。この教会には先見の明がある。法王教は、プロテスタント諸教会が偽りの安息

日を承認して忠誠を表していることや、過去に法王教自身が用いたその手段によって、この教会が日曜安息日を強制する準備をしつつある事実を見て、静かに時の熟するのを待っている。

真理の光を拒絶する者が、この自称無謬権力の援助を求め、彼の制定した日曜日を尊重する時が来るであろう。ローマ教会がこの働きにおいて、すぐプロテスタント教会に助けの手をさしのべるであろうことは、想像にかたくない。教会が服従しない者に対してどのような措置を取るべきかは、法王教の指導者たちをおいて他に誰が知り得よう。

ローマ・カトリック教会は、あたかもくもの巣のように全世界に分布し、法王庁の支配下にあってその利害に役立つよう計画されている一大組織を形成している。全世界における幾千万という教会員は、法王に忠誠を尽くすように訓練されている。国籍や政府がどうであろうと、彼らは教会の権威を他のいっさいのものの上に

あるものと見なさなければならぬ。彼らは国家に忠誠を誓うかも知れないが、その陰において、ローマ教会に対する服従を誓約し、教会の利益に反する場合には、国家に対するどんな誓約も破ってもよいことになっている。

歴史は、この教会が巧みに根気よく国事に入り込む努力を続け、一度足場を得ると、王侯や国民を破滅させてでも教会自身の目的を進めることを証明している。1204年に、法王インノセント三世は、スペインのアラゴン王ペドロ二世にむりやり次のような異常な誓約を強制した。「わたくしアラゴン王ペドロ二世は、わが主なる法王インノセント並びにその後継者及びローマ教会に対し、常に忠実かつ従順であること、また法王に対する我が国の服従を保ち、カトリックの信仰を擁護し、異端に墮落した者を迫害することを誓約する」(John Dowling, "The History of Romanism," b. 5, ch. 6, sec. 55)。このことは、「法王が皇帝を廃位させることは合

法である」、「法王は不正な統治者の臣下には、その王に対する忠誠を免ずることができる」という法王権に関する主張と一致するのである（Mosheim, b. 3, cent. 11, pt. 2, ch.2, sec. 9, note 17. 付録をも参照）。

差し迫った危険

また、ローマ教会は決して変わらないということが、この教会の自慢の種であることを忘れてはならない。グレゴリー七世やインノセント三世の主義は、今日も依然としてローマ・カトリック教の主義である。そして、この教会がもしひとたび権力を持つならば、過去に劣らない勢いをもってその主義を実行することは必然である。プロテスタントが日曜日を崇める運動において、ローマ教会の助けを受け入れようと企てるとき、彼らは自分たちのしていることが分からないのである。彼らが自分たちの目的の達

成に熱中している間に、ローマ教会は、その権力の再建、失墜した至上権の回復をねらっているのである。ひとたびこのことが米国において確立されるならば、教会は政権を支配するようになり、宗教上の制度が国家の法律によって強制され、教会と国家の権威が良心を支配し、米国におけるローマ教会の勝利は確実なものとなるのである。

長い間、神のみ言葉はこの差し迫った危険について警告してきた。これが顧みられないならば、プロテスタントの世界は、ローマ教会の目的が実際に何であったかを知ったときには、もはや手遅れになってそのわなを逃れることができないであろう。ローマ教会は黙々とその権力を増大しつつある。その教えは議会に、教会に、また人々の心の中に深く影響を及ぼしている。法王制は巨大な建造物を築き上げているが、その奥まった部屋では昔の迫害がくり返されるであろう。自分が手を下す時が来たら、目的を遂

行しようと、教会は、ひそかにそして怪しまれないように、勢力をのぼしつつある。この教会が何よりも望むものは、有利な立場である。そして、それはすでに与えられつつある。我々はローマ教会の真の目的が何であるかを間もなく見、かつ感じるであろう。神のみ言葉を信じ、それに従う者は誰でも、そのことによって非難と迫害を受けるであろう。

もっと詳しく知りたい方のために、
大争闘小冊子シリーズの完全版

“キリストとサタンの大争闘”



E. G. ホワイト著

ポケット版 400円

各時代の人類歴史に展開されてきた善と悪、真理と誤謬の大争闘の真相と悪の勢力の陰謀と策略を明らかにし、それに勝利する方法、今起こっている諸事件と諸現象はどんな意味を持っているか、人類にどんなすばらしい未来が待っているか等々が解明されている必読の書！

お問い合わせ、お申込みは下記の連絡先まで

サンライズ ミニストリー

〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村字今泊1471

TEL(0980)56-2783 FAX(0980)56-2881

contact@srministry.com

www.srministry.com

大争闘小冊子シリーズ

- No.1 罪惡の起源
- No.2 サタンと人類の戦い
- No.3 悪魔のわな
- No.4 人は死んだらどうなるか？
- No.5 心霊術の正体
- No.6 現代キリスト教会の危機
- No.7 ローマ法王教の狙い
- No.8 差し迫った戦い
- No.9 ただ一つの防壁—聖書
- No.10 世界への最後の警告
- No.11 大いなる悩みの時
- No.12 神の民の救出
- No.13 平和な千年期は来るか？
- No.14 大争闘の終結



サンライズ ミニストリー

〒905-0428 沖縄県国頭郡今帰仁村字今泊1471

TEL(0980) **56-2783** FAX(0980) **56-2881**

contact@srministry.com

www.srministry.com